

Laryngeal sensory neuropathy — 喉頭運動を指標に治療した症例 —

渡部 浩

わたなべ耳鼻咽喉科・アレルギー科

最近、海外において、咽喉頭異常感症や遷延性咳嗽の原因疾患として、Laryngeal sensory neuropathyやPostviral vagal neuropathy等の名称での報告が散見される。病態として迷走神経障害が想定されており、術後性、特発性、上気道感染後に生じる。一般臨床においては、上気道感染後に生じる例が多く、ベル麻痺やヘルペス感染後疼痛等と同様のウイルス感染後神経障害が想定されている。本例の治療として、神経障害性疼痛の治療に用いられる、抗うつ薬のアミトリプチリンや抗けいれん薬のガバペンチン、プレガバリンが使用され、有効性が報告されている。

一般には、既知の原因疾患を除外したのちに診断される。つまり慢性乾性咳嗽においては、咳喘息、アトピー性咳嗽、胃食道逆流症等の診断的治療を行い、改善が見られない場合に本例を疑い、上記の治療が行われる。この場合、患者の咳嗽に伴う苦痛を取り除くのに時間を要する。

一方で、本例の迷走神経障害に伴い、反回神経麻痺、上喉頭神経麻痺等の運動神経障害が生じることもあり、知覚神経障害に伴い、喉頭痙攣や奇異性声帯運動を生ずることが報告されている。これらの喉頭運動所見を指標にすることにより、早期に本例の治療を開始できる可能性がある。

今回、私は遷延性咳嗽症例において、喉頭運動所見を指標として本例を疑い、プレガバリンで治療を行った症例を経験したので報告する。